

学生生活チェックカタログを用いた学生生活の実態調査

—看護学科学生の結果—

小坂 信子¹⁾ 大高 恵美¹⁾ 原田 慶子¹⁾ 磯崎富美子¹⁾ 重川 敬三¹⁾
岩谷 隆博¹⁾ 藤沢 緑子¹⁾

The Actual State Investigation of the Student Life Analyzed by Catalog of Quality of Student Life — The Response of the Nursing Students —

Nobuko KOSAKA Emi OHTAKA Keiko HARADA Fumiko ISOZAKI Keizou SIGEKAWA
Takahiro IWAYA Noriko FUJISAWA

要旨：本研究は、学生生活の実態を把握する目的で、九州大学健康科学センターの峰松らが作成した「学生生活チェックカタログ (ver.3)」を使用して調査した。その結果、以下のことが明らかになった。1. QOSL 合計得点と満足度得点は、他学校より本学は高く、QOSLや満足度の高い学生生活を送っている。2. QOSLの合計得点と満足度得点は正の相関があり、学生が満足感のある学生生活を送れるよう支援することが大切である。3. QOSL各領域の得点と具体的内容には学年差があり、各学年の特徴をふまえ支援することが大切である。4. 情報収集メディアを活用できる環境、人間関係を緊密にする場、学生が具体的な行動に移せる支援の必要性が示唆された。

キーワード：看護学科学生、学生生活の質、満足度、支援

Summary : This research investigated the actual condition of the student life of the Care and Welfare students. Catalog of Quality of Student Life (version 3) which was invented and developed by Associate Professor Minematsu from the Health Science Center at Kyushu University was used. The following points were revealed.

- 1.The result showed that the QOSL score in total and the satisfaction score were higher compared to other schools and it can be generally said that the students are enjoying the school life.
- 2.There was a positive correlation between the QOSL score in total and the satisfaction score and it is necessary to support the students to be able to lead satisfied and enjoyable school life.
3. It was revealed that there was a difference in QOSL scores and its contents according to the students' age. It is necessary to grasp the characteristics of students of different grades and give enough support.
4. It was also discussed that to give students support and an environment where they can utilize the information they have collected as well as fostering the healthy human relationship.

Key words : Nursing Students, QOSL, satisfaction degree, support

1) 学生部

本研究は、平成14年度日本赤十字秋田短期大学共同研究費助成によるものである。

はじめに

大学や短期大学の進学率は、平成13年度現在48.6%であり¹⁾、入学してくる学生は、資質や能力、知識、興味・関心などにおいて多様化している。また、現代の大学生の社会生活の実体験不足・生活力の低下やコミュニケーション能力の低下が指摘されている²⁾。大学はこのような学生が豊かなキャンパスライフを送ることができるように細やかな教育・指導が求められている³⁾。

大学が学生のサポートを行うためには、学生の現状を理解することが必要である。本学ではこれまで、独自の質問票を用いて調査を行い、学生の実態を把握することに努めてきた。

今回、大学生生活の質（Q O S L：Quality of Student life）という視点から、九州大学健康科学センターの峰松ら⁴⁾が作成した、学生像を包括的に把握する「学生生活チェックカタログ（ver.3）」を用いて、本学学生351名（看護学科244名、介護福祉学科107名）を対象に調査を行った。これまでに、同調査用紙を用いた看護系や福祉系短期大学の調査報告はみられなかった。

ここでは、看護学科学生の結果について報告する。

I. 研究目的

本学学生の学習や日常生活の支援の方向性を検討するために、学生生活の実態を把握する。

II. 研究方法

1. 対象：本学看護学科学生（以下、本学とする）244名（1年生84名、2年生83名、3年生77名）

2. 調査方法：質問紙法。峰松ら⁴⁾が作成した「学生生活チェックカタログ（ver.3）」を使用した。この調査用紙は、大学生のQ O S Lを「心身の一般的不調（18項目）」「学業・知的成長（17項目）」「生活・経済環境（15項目）」「大学内環境（15項目）」「自己効力感（15項目）」「社会的関係（20項目）」「未来的展望（15項目）」「全体的充実感（5項目）」の領域からとらえている。また、各領域の最後に満足度項目を配置し、「全体的充実感（5項目）」と併せて12項目で満足度を測定できるよう構成されている。回答は、はい—いいえの二件法で求めた。

3. 調査期間：平成14年7月15日～同年7月19日。

4. 分析方法：データ入力時、逆転項目の得点を反転させ、得点が高いほどQ O S Lが高くなるようにデータ化を行い、Q O S L得点と満足度得点は単純集計した。なお、「心身の一般的不調」の領域は、逆転項目が多く設定されている。データ分析時はパソコン用統計ソフトSPSS（11.0J）を使用した。また、3学年間における比較は一元配置分散分析（Tukey法を用いた多重比較）を行なった。

5. 倫理的配慮：事前に調査の目的、データの取り扱い、成績等とは無関係であることなどを説明し協力を依頼した。調査に同意した学生の調査用紙の回収は、無記名で回収箱を3日間設置して行った。

III. 結果

回収率は196名（80.0%）で、分析項目に欠損値がなかった172名（有効回答率87.8%）を対象とした。回答者の背景は1年生58名（67.5%）、2年生62名（74.7%）、3年生52名（69.0%）である。

1. Q O S L合計得点と満足度得点の平均値

Q O S L合計得点の平均値は全体で81.07±15.83であり、1年生が3年生より（ $p < .01$ ）、2年生が3年生よりも有意に高かった（ $p < .05$ ）。満足度得点は全体で7.75±2.88であり、1年生が3年生よりも有意に高かった（ $p < .01$ ）。

Q O S L合計得点と満足度得点は、1年生が一

表1 学年別のQ O S L得点と満足度得点

学 年	Q O S L合計	満足度得点
1年	平均値	85.02
	度数	58
	標準偏差	16.33
2年	平均値	82.62
	度数	62
	標準偏差	13.17
3年	平均値	74.86
	度数	52
	標準偏差	16.56
全体	平均値	81.07
	度数	172
	標準偏差	15.83

多重比較 ** $p < .01$ * $p < .05$

表2 学年別QOSL各領域の平均値

学年		心身の一般的不調	学業・知的成長	生活・経済環境	大学内環境	社会的関係	自己効力感	未来的展望	全体的充実感
1年	平均値	13.90	10.08	9.07	13.47	14.95	9.45	10.29	3.02
	標準偏差	2.50	3.27	2.39	3.90	3.21	3.79	2.38	1.78
2年	平均値	12.05	11.84	8.65	13.00	4.44	8.85	10.76	3.03
	標準偏差	3.37	2.74	2.24	3.59	2.88	3.00	2.03	1.35
3年	平均値	11.90	9.27	7.87	12.35	14.75	7.31	9.23	2.10
	標準偏差	3.10	3.50	1.77	3.52	3.55	4.18	3.14	1.50
全体	平均値	12.65	10.74	8.55	12.96	14.70	8.59	10.14	2.74
	標準偏差	3.13	3.32	2.21	3.68	3.19	3.74	2.59	1.60

多重比較 ** p <.01 * p <.05

番高く学年が進むにつれ低くなる傾向が見られた。全学年のQOSL合計得点と満足度得点についてピアソンの相関係数を求めた結果、 $r=0.838$ ($p<.01$) で有意な正の相関があった。(表1)

2. QOSL各領域の平均値

「心身の一般的不調」の平均値は、学年が進むにつれて低くなっており、1年生が2、3年生より有意に高かった ($p<.05$)。「学業・知的成長」は、2年生が3年生より有意に高かった ($p<.01$)。「生活・経済環境」「自己効力感」は、学年が進むにつれて低くなっており、1年生が3年生より有意に高かった ($p<.05$)。「未来的展望」は、2年生が3年生より有意に高かった ($p<.05$)。「全体的充実感」は、3年生が1年生より ($p<.05$)、また、2年生より有意に低かった ($p<.05$)。「大学内環境」「社会的関係」は、学年が進むにつれ平均値が低くなる傾向が見られたが、学年間で有意差はみられなかった。(表2)

3. QOSL各領域の具体的内容

1) 心身の一般的不調について

全学年に共通していたのは(以下、共通していたとする)は、「いつも孤独な感じがする」や「風邪を引きやすくて困っている」に『いいえ』、「ぐっすりよく眠れる」に『はい』と答えた学生は70%以上であった。学年別では、3年生は「何となく不安になることが多い」に『いいえ』と答えた学生が26.8%であった。(図1)

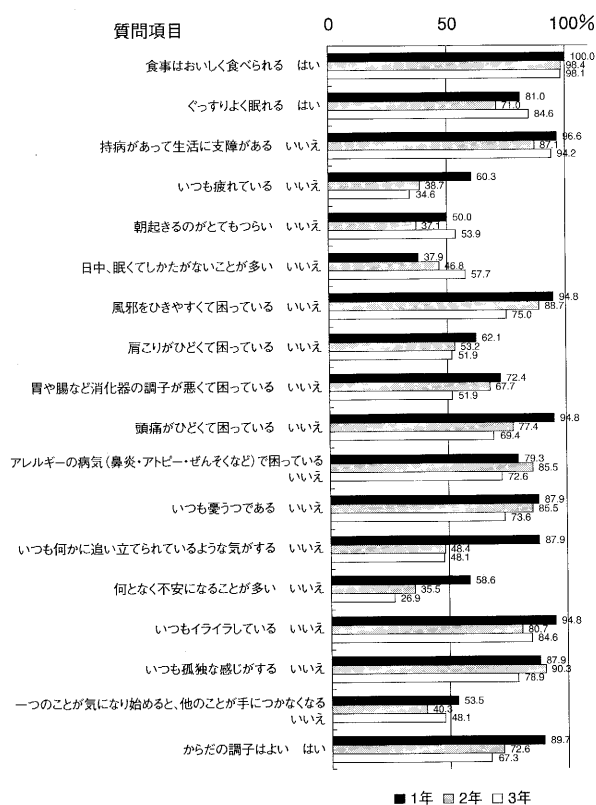


図1 心身の一般的不調

2) 学業・知的成長について

共通していたのは、「授業は欠席がちである」に『いいえ』と答えた学生は90%以上であり、「今通っている学校での勉強によって知的に成長したと思う」に『はい』と答えた学生は60%以上であった。また、17項目中13項目において70%が肯定的回答をしていた。しかし、「新しい知識を増やすために本を読んでいる」に『はい』と答えた学生は20%以下で、特に2年生は6.5%であった。「授業内容がわからないときに、教官に質問や相談ができる」に『はい』と答えた学生は約40%であった。(図2)

3) 生活・経済環境について

共通していたのは、「学資を得るためにアルバイトに追われている」「通学に時間がかかりすぎて自分の時間がもてない」「通学時や住居周辺の安全に不安がある」に『いいえ』と答えた学生は70%以上であった。また、「情報を得るためにコンピュータを自由に使える環境にある」に『はい』と答えた学生は50%以下であり、「習い事をしている」「学外の勉強会に参加している」に『はい』と答えた学生は10%以下であった。学年別では、「生活時間のコントロールがうまくできている」に『はい』と答えた学生は3年生で30.7%で、「研究や勉学が忙しくて、息抜きする時間がとれない」に『いいえ』と答えた学生は1年生で82.8%であった。(図3)

4) 大学内環境について

共通していたのは、「学内の安全に不満がある」「学校の洗面所に不満がある」に『いいえ』と答えた学生は85%以上であった。また、「学校の図書をうまく利用できている」に『はい』と答えた学生は70%以上であった。反面「教室の設備や構造に満足している」に『はい』と答えた学生は40%以下であり、「学校の中や周辺で、必要な文具や日用品を買うのに不便が多い」に『いいえ』と答えた学生は60%以下であった。学年別では、「困ったときに保健管理センター(保健室)・学生相談室などを利用できる」に『はい』と答えた学生は3年生で76.9%で、1年生で22.4%、2年生で14.5%であった。(図4)

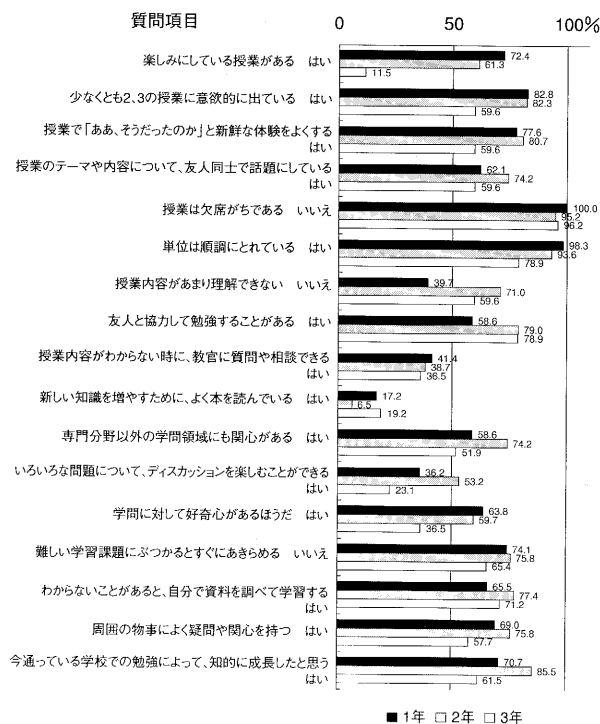


図2 学業・知的成長

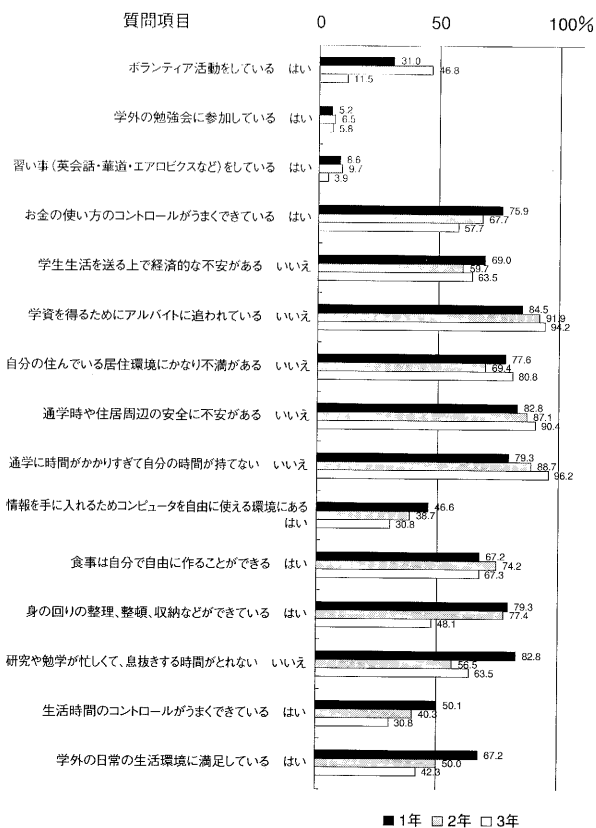


図3 生活・経済環境

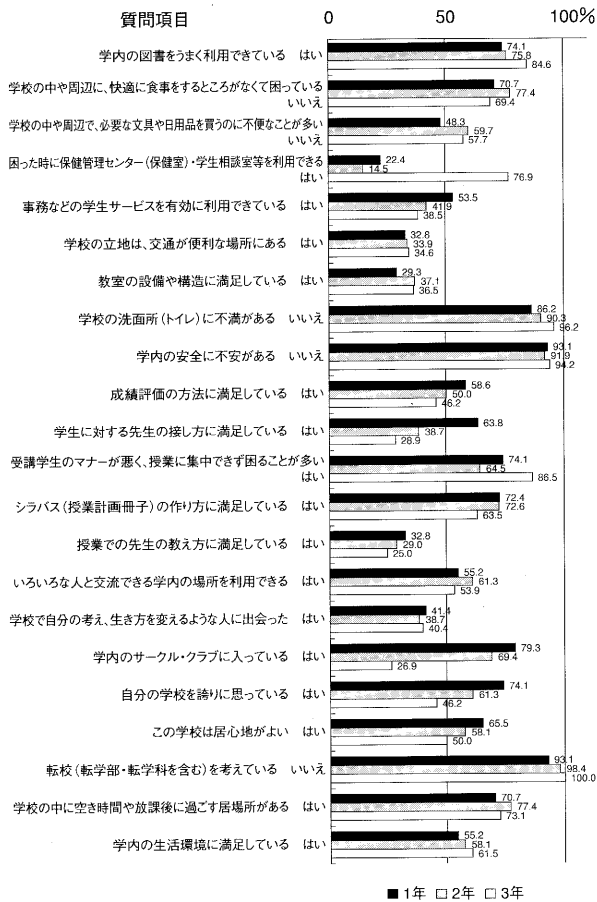


図4 大学内環境

5) 社会的関係について

共通していたのは、「いろいろなことを話せる友達がいる」に『はい』と答えた学生は90%以上であり、「自分は周りの人から受け入れられている」「悩みを相談できる人がいる」に『はい』と答えた学生は70%以上であった。また、「人が自分のことをどう見ているかとても気になる」に『いいえ』と答えた学生は40%以下であった。(図5)

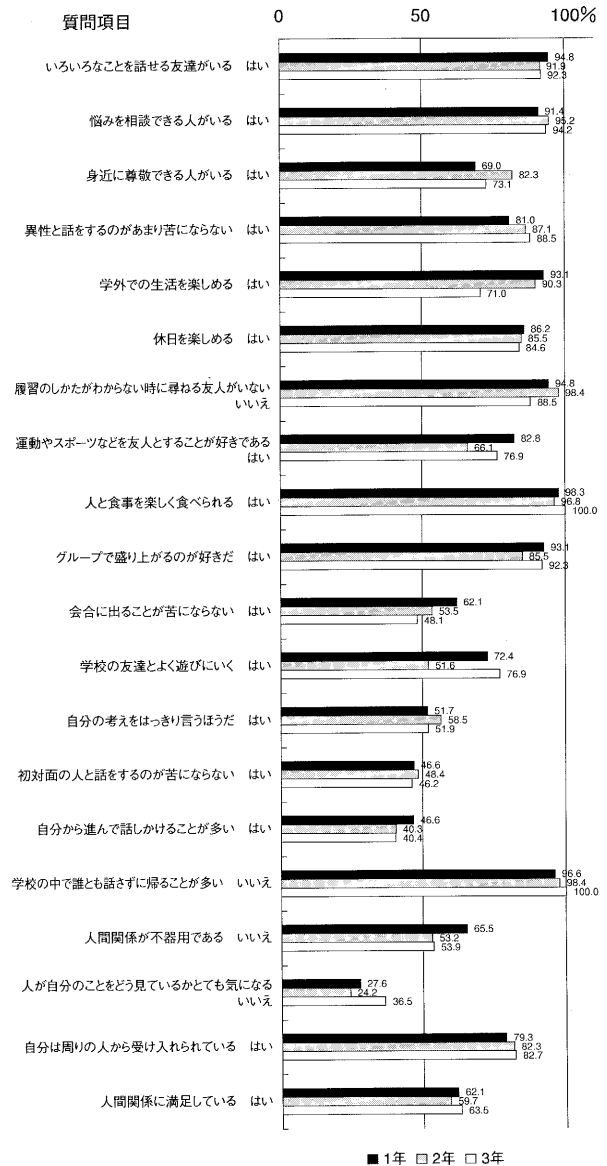


図5 社会的関係

6) 自己効力感について

共通していたのは、「困難な出来事にもぶつかっても、どうにかできると思えることが多い」「これからの人生で何か意味のあることができると思う」に『はい』と答えた学生は60%以上であった。「自分の能力が発揮できる」に『はい』と答えた学生は30%以下で、特に3年生が11.5%であった。「何事にも億劫である」「物事の取りかかりが遅い」に『いいえ』と答えた学生は40%以下であった。学年別では、「いざというときに力が発揮できなくなる」「自信があったり、なかったり、変化が激しく困っている」に『いいえ』と答えた学生が3年生でそれぞれ32.7%、28.9%であった。(図6)

7) 未来的展望について

共通していたのは、「この学校での経験は将来のためになる」「将来どんな職業に就くのか、ある程度の方向を決めている」に『はい』と答えた学生は80%以上であった。しかし、「先のことを考えると不安になる」に『いいえ』と答えた学生は30%以下で、特に3年生は7.7%であった。(図7)

8) 全体的充実感について

共通していたのは、「学校生活に満足している」「やりがいがあることを持っている」「夢中になってできるような好きなことがある」「やりたいことが多く、とても忙しい」に『はい』と答えた学生は、1年生及び2年生は50%以上であるが、3年生は50%以下であった。特に「毎日意味もなく生活が過ぎてゆくような気がする」に『いいえ』と答えた学生は3年生で36.5%であった。「やりたいことが多く、とても忙しい」について『はい』と答えた学生は2年生が77.4%であった。(図8)

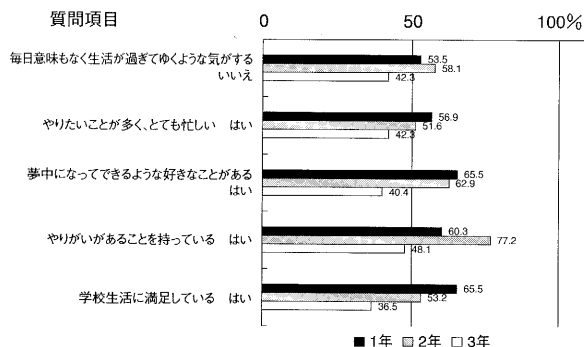


図8 全体的充実感

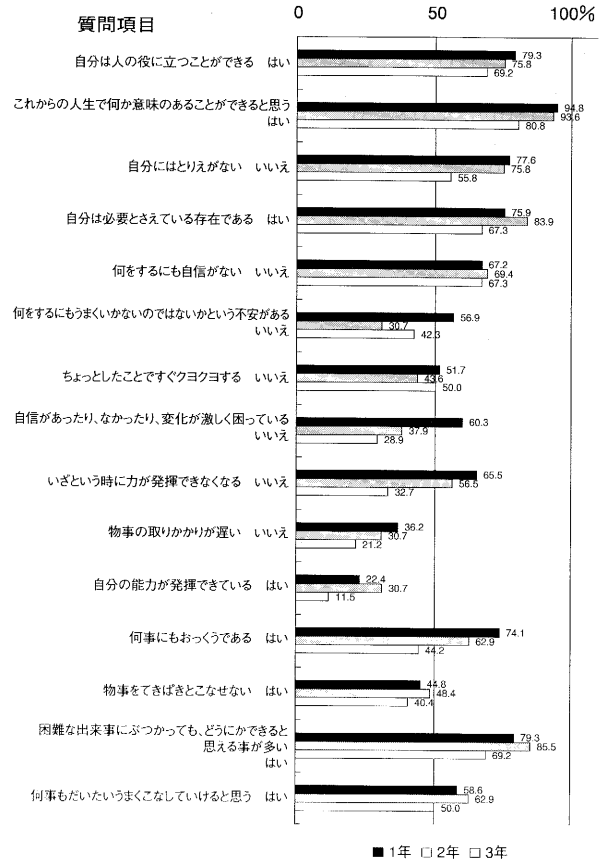


図6 自己効力感

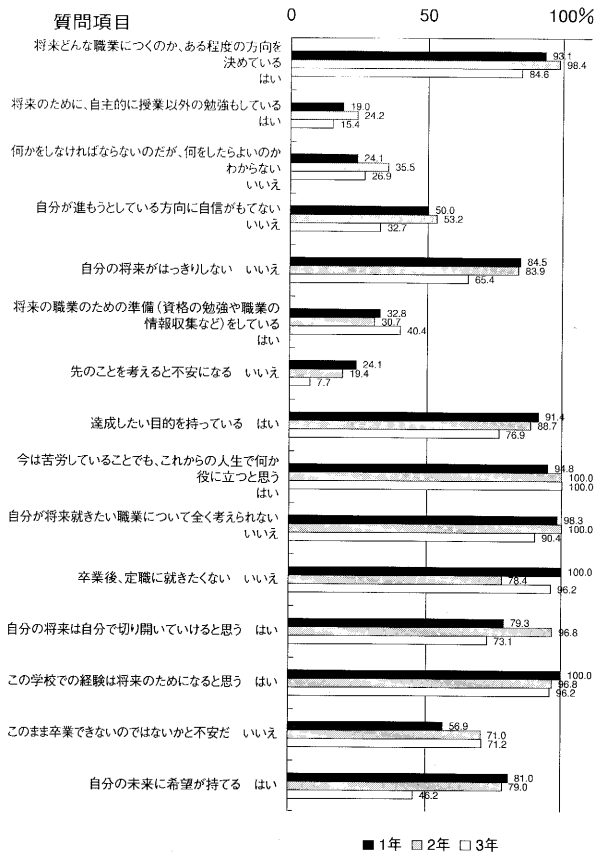


図7 未来的展望

IV. 考察

1. QOSL得点と満足度得点について

QOSL得点と満足度得点は、1年生が高く学年が進むにつれ低いことが明らかになった。福盛ら⁵⁾が報告している四年制大学生・短大生・高専学生・専門学校生（看護系）と比較すると、各学校より本学は高く、学生生活は満足していることが考えられる。また、QOSL得点と満足度得点は正の相関があることから、QOSLを高めるには学生が満足感のある学生生活を送れるよう支援することが大切と考える。

2. QOSL各領域の平均値について

福盛ら⁵⁾の報告にある専門学校生と比較すると、「心身の一般的不調」「生活・経済環境」「大学内環境」「全体的充実感」の各領域で平均点が高かった。特に「大学内環境」については報告にある専門学校生が7.22であるのに対し、本学では12.96であった。本学は開学7年目であり施設・設備等の充実が影響していると考えられる。反対に「学業・知的成長」「社会的関係」「自己効力感」「未来的展望」について低かった。全体的な傾向として、身体の状態がよく、生活・大学内の環境に満足しているといえる。しかし、学業・自分の能力・将来性に不安を感じていることが考えられる。

学年間での比較では、「大学内環境」「社会的関係」は同傾向であった。「心身の一般的不調」「生活・経済環境」「自己効力感」「全体的充実感」について1年生が3年生より高く、「学業・知的成長」「未来的展望」「全体的充実感」について2年生が3年生より高かった。カリキュラムの内容が影響していると考えられるが、この結果をふまえ各学年が異なるという意識を持って関わる必要がある。

3. QOSL各領域の具体的内容について

「心身の一般的不調」については、学年が進むにつれ低くなっており、特に3年生の場合、慢性的な疲労感があり時間に追われた生活を送り不安感を感じている。3年生は学内の授業から臨地実習が主体の学習形態に変化し、新しい学習環境等に様々な不安をもちながら学生生活を送っていることが考えられる。しかし、食欲や熟睡感があり、持病があつて生活の支障がある学生が少ないことから、学業に差し障りのある心身の不調感を感じ

ている学生は少ないといえる。

「学業・知的成長」については、全学年とも大学内の学習について意識が高かった。3年生は心身の疲労が著しい傾向があるが、看護系短大生として、目的意識を持ち最後まで学業を遂行しようとする姿勢が伺える。

「生活・経済環境」については、1年生は適度に気分転換を行ないうまく時間をコントロールしている。全学年とも新しい知識を得るために本を読む学生は少なかった。読書離れは一般的な傾向であり、本学でも同様の結果であった。また、情報を得るためにパソコンを自由に使える環境にないとしている学生が約50%いた。インターネットが情報収集メディアとして一般に多く活用されている現状があるので、本学でも自由に活用できる環境を整える必要がある。

「大学内環境」については、環境に関する安全性や清潔面は満足しているが、教室の設備や構造に満足している学生は40%と少ない。「夏は暑くてクーラーがほしい」という学生の声があることから、それが影響している可能性がある。「困ったときに保健室や学生相談室を利用できる」とした学生が3年生に多い。心身ともにゆとりのない3年生が相談する場所を確保できていることは意義あることである。1年生及び2年生の場合、友人間で解決している可能性もあり、また、自ら相談に行くという行動に移せないでいる可能性も考えられる。必要な時に相談できる環境作りが大切であると考えられる。

「社会的関係」については、相談できる友人がおり、友人関係は良好と考えられるが、他者のまなざしへ過敏に反応する傾向があり他者と積極的に交友関係を持つまでには至っていない。これらは、福盛ら⁵⁾の報告と同様であり、青年期の学生の特徴といえる。グループで盛り上がる雰囲気はあるが自ら話しかけることは少なく、最初の話しかけるきっかけが難しいと感じている学生が多いと考えられ、自由に話せる場を設定していく必要がある。

「自己効力感」については、物事に対して自分で対応できるという可能性を信じ、自己に対する肯定感や有能感を持っているといえる。しかし、自分の能力を発揮できるとしている学生は30%以下であり、これは福盛ら⁵⁾の報告と同様であった。学生の要求が高いのか、能力を発揮できる機会が見あたらないのかは明確ではなかった。また、何

事にも億劫であり物事の取りかかりが遅いと答えた学生は、福盛ら⁵⁾が報告している大学学部生より全学年において多いことが明らかになった。

「未来的展望」については、本学での学習が有効であるとし将来の職業を決め目的意識を明らかにして学生生活を送っている。これらは本学の今までの調査結果⁶⁾と一致している。しかし、3年生の場合、将来に対して不安を持っている学生が多く、今後の就職試験や国家試験などが不安要素となっていると考えられる。今回の調査時期が7月であったが、早期からの進路相談や学習への支援が重要といえる。また、物事への取り組み姿勢が遅い傾向にあることから、理想や目標に近づくために、学生が具体的な行動に移せるような関わりを模索していく必要があると考える。

「全体的充実感」については、1年生及び2年生がやりたいことを見いだして生活を送っていると考えられる。

V. 結論

峰松ら⁴⁾が作成した「学生生活チェックカタログ(ver.3)」を用いて調査した結果、以下のことが明らかになった。

1. QOSL合計得点と満足度得点は、他学校より本学は高く、QOSLや満足度の高い学生生活を送っている。
2. QOSLの合計得点と満足度得点は正の相関があり、学生が満足感のある学生生活を送れるよう支援することが大切である。
3. QOSL各領域の得点と具体的内容には学年差があり、各学年の特徴をふまえて支援することが大切である。
4. 情報収集メディアを活用できる環境、人間関係を緊密にする場、学生が具体的な行動に移せる支援の必要性が示唆された。

終わりに

同調査用紙を用いた調査は今年度初めてであり、また、この調査用紙は学生自身に自分の生活への気づきを促す機能を持っているため、それらを活用した継続的な調査が必要である。学年間の違いについては今後の課題としたい。

なお、今回の調査にご協力くださいました本学学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省：2002年度学校基本調査速報
- 2) 福盛英明他：大学生のQOLの研究(2)簡易版「大学生生活チェックカタログ45」の開発と実施、大学生の生活の質(Quality of Student Life)に関する研究－「大学生生活調査カタログ」の開発－報告集, p13, 2002
- 3) 文部科学省：大学における学生生活の充実方策について(報告)－学生の立場に立った大学作りを目指して－, 大学と学生, 472号, p19, 2000
- 4) 峰松修他：大学生の生活の質(Quality of Student Life)に関する－「大学生生活調査カタログ」の開発－, pp.45～47, 2002
- 5) 福盛英明他：学生のQOSLの横断的研究－大学・短大・高専・専門学校の比較検討－大学生の生活の質(Quality of Student Life)に関する研究－「大学生生活調査カタログ」の開発－報告集, pp.35～36, 2002
- 6) 酒井志保他：看護学生の受験理由と看護学科選択理由に関する実態－本学看護学科1期生の入学時調査から－, 日本赤十字秋田短期大学紀要, No. 1, pp.83-90, 1996